

韓国社会福祉学会での国際シンポジウム報告

長谷川 俊雄（白梅学園大学）

2017年10月28日、第60回韓国社会福祉学会・2017年度秋季共同学会大会がソウル大学で開催されました。ソウル大学はとて広く、日本より少し早い紅葉が始まっていました。

「日・中・韓国国際シンポジウム」において「日本におけるひきこもり問題とソーシャルワークの課題～実践・政策・研究の展開をとおして～」の演題で発表させていただきました。ひきこもる若者たちに対して広く社会的関心が寄せられ、社会問題と認識された以降における実践・政策・研究、およびその関連性について、1990年代以降を俯瞰したレビューという内容で取り組みました。発表の最後に、実践・政策・研究の3領域における課題を提起しました。

ここでは紙幅の関係でひきこもり問題をめぐる研究の課題のみ示すことにします。①ひきこもり問題の定義の共通化された基本的見解が確立されていない。②ひきこもりの実態と問題の把握が困難であること。③ひきこもり問題の多様性と多義性の整理が十分でないこと。④社会福祉やソーシャルワーク領域におけるひきこもり問題を対象とした研究方法が確立していないこと。⑤ひきこもり問題を研究対象とする研究者が少ないこととネットワークが弱いこと。⑥ひきこもり問題を対象とするセンターストリーの役割と機能を持つセクションがないこと。なお、これらは演者による仮説的な課題となります

発表後の質疑応答では、韓国の研究者からの積極的な質問と意見がありました。演者が特に心に留めたことを私見として紹介させていただきます。

①ひきこもり概念の多様性

各国でひきこもり概念が異なるということです。韓国の研究者や実践および政策上におけるひきこもり概念はネット依存症の青少年が「外出できなくなる」そして「学校生活や家庭生活に支障が生じる」状態をひきこもり概念としているように受けとめました。つまり、ひきこもりという現象や社会問題を国際的に語るときの「基準」や「共通理解」が成立していないということです。ひきこもり研究の国際的な発展の必要性があることを導くことができます。

②実践と政策と研究の連関性

ひきこもり問題の深刻さに対して支援の実践が生まれ、その実践の蓄積とひきこもり問題の認識の深まりによる政策の発展という「つながり」はあるものの、研究の弱さと浅さをどのように克服していったら良いのかという課題をあらためて認識する機会になりました。

例えば、「子どもの貧困」問題についていえば、社会的関心の深まり、多岐にわたる実践の広がり、社会問題としての深まりと実践の広がりを踏まえた政策の展開、そして実践と政策へ大きな影響を与える研究の質と量の存在が「子どもの貧困」を解決する歩みを進めています。「子どもの貧困」のように「ひきこもり問題」に対する社会福祉研究の役割と責任の重さを感じています。

最後に、第1回目の日・中・韓国国際シンポジウムで発表の機会をいただいたことに感謝申し上げます。